

### 四聖諦と他力本願の生活

仏教の根本思想の一つに、四聖諦しやうたいというのがあります。この度はこの四聖諦の教義みまと、他力本願の生活くわんについて述べてまいりましょう。先ず四聖諦を表示しめしましょう。

苦諦 (生死) ……果	迷 ……凡	一体 ……浄土門
集諦 (煩惱) ……因		
聖道門 ……不二		
滅諦 (涅槃) ……果	悟 ……仏	
道諦 (菩提) ……因		

### 苦諦

これは積尊の人生の根本の見方であり、人生は苦なり」との断定であります。諦たいという字は「あきらかにみる」という意味であり、仏教では「真理」をあらわす文字であります。人生は苦しいものだということが、真理であり、随つて、人生は苦しむところであつて楽しい所ではないとあきらかに知れたいのであります。尤もそれは常識的に云う所の樂が人生にないといふのでありません。人生は苦樂二境をもつた所であり、その苦樂二つがあることをさして人生は苦なりといふのであります。それについて味あうべきは、聖人が真仏土卷だいぼつねほんぎやうに引かれた、大般涅槃經だいぱんねはんぎやうであります。

「善男子ぜんなんし、大樂あるが故に大涅槃と名く。涅槃は無樂なり。四樂を以ての故に大涅槃と名く。何等をか四となす。一には諸樂を断ずるが故に。樂を断ぜざる者は、則ち名けて苦となす。若し苦有れば大樂と名けず。樂を断ずるを以ての故に、則ち苦有ること無し。無苦無樂乃ち大樂と名く。涅槃の性は無苦無樂なり。是の故に涅槃を名けて大樂となす。是の義を以ての故に大涅槃と名く。復次に善男子、樂に二種あり、一には凡夫、二には諸仏なり。凡夫の樂は無常敗壞むじやうはいえなり。是の故に無樂なり。諸仏は常樂なり。變易有ること無きが故に大樂と名く。

復次に善男子、三種の受あり。一には苦受、二には樂受、三には不苦不樂受なり。不苦不樂受(凡夫の場合)は是れ亦苦となす。涅槃も不苦不樂に同じと雖も然も大樂と名く。大樂を以ての故に大涅槃と名く。」

この大涅槃とは、四諦の中の「滅諦」のことであり、この涅槃は、苦樂の対立を超えたる大樂であります。生死界は徹頭徹尾、苦であります。我等が樂と執着するものも亦、苦である。ですから龍樹菩薩は「苦しみの新しいものを樂と考へているのだ」と云われました。この苦とは即ち、「生死」の苦のことであり、

生、老、病、死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦、を八苦と云い、苦苦（苦と感ずる苦）壊苦（楽しみのこわれてゆく苦）行苦（一切のかわりうつる苦）を三苦と云います。

苦は一切の問題の母であります。若し苦がなければ生きることすらあり得ませぬ。而して人生は永劫に苦悩であります。宗教はこの人生の生々しい苦より出発します。ですから宗教は、血あり涙ある人生の生きた事実であります。

### 集諦

すでに生きることには「苦」であります。それではその苦は何によつて生まれたのであるか。釈尊は、苦の因をたずねて、其処に「集諦」を見出されました。集とは、集めること、即ち人と物とを所有しようとする生活態度であります。愛欲の煩惱のことであります。人間は渴愛します。楽欲と生活と、常住とに対する渴愛のために苦しむのであります。平たく云えば貪欲のために苦しみます。財、色、食、名、眠の五欲をほしいままにしたいと貪欲をおこし、むくいらねば瞋恚となり愚痴となります。つまり、生死の果の根底をなすものは、この悪業煩惱に外なりません。

以上、苦と集とは、虚妄の因と果とであります。そこで更に真実の因果をたずねねばなりません。

### 滅諦

滅諦とは、煩惱を滅した義で、涅槃のことです。仏のさとりの世界であります。人生の究極目的であり、理想の彼岸であり、生死動乱をはなれ苦悩を超え、智慧に生きて、再び迷いの「後有」を受けないさとり境地であります。真実の果であります。

親鸞聖人は、この「滅」の世界を「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。必ず滅度に至れば、即ち是れ常楽なり。常楽は即ち是畢竟寂滅なり、寂滅は即ちこれ無上涅槃なり、無上涅槃は即ちこれ無為法身なり。無為法身は即ちこれ実相なり、実相は即ちこれ法性なり、法性は即ちこれ真如なり、真如即ちこれ一如なり。然れば弥陀如来は、如より来生して、報、応、化種々の身を示現したまう。」と証卷に述べられました。この滅度、涅槃こそ、真実の果であり又一切真実生活の根底であります。

### 道諦

真実の果である滅諦に如何にして至るのであるか。その因をなすものが即ち「道諦」であります。「みち」によらないでどうして、真実の果に至ることができましょう。道諦とは所謂、八正道であります。

正見。四諦に対する正しい信仰、信心の智慧より生まれます。

正思惟。悪い願望を去つて、正しい本願に生きること、智慧の世界であります。

正語。口の四悪、妄語、両舌、綺語、悪口をはなれる。

正業。身の三悪、殺生、偷盜、邪淫をすてて、大慈悲の活動に生きること。

正命。法にそむかず、三毒をはなれ正しい戒をたもち、如法に生活すること。  
正精進。懈怠を去って、快活なる精進をつづけること。  
（以上の四は廃悪修善の戒である。）

正念。常に正法に随順して、正しい念に住すること。  
正定。身心動乱をはなれて寂靜に住すること。

（以上二は、安心であり、安定であつて、所謂「定」であります。）

この八正道こそ、涅槃に至る道であります。菩提であります。この八正道は所謂、聖道門の、戒定、慧の三学にふりあてて味あうことが出来ます。

以上の如く、仏教はこの四聖諦として味あうことが出来ますが、実はこの四諦こそ、仏教の根幹をなすもので、仏教であれば、それが何宗であろうとも、この四本柱の上にたためものはありません。唯、この骨格に対する、肉づけや、ころもが違っているにすぎません。生死、煩惱、涅槃、菩提の四諦を如何に観じ、如何に信じ、如何に生活するか、どの深さにみているか、そこが我等にあたえられた天地であると共に、大乘、清浄、聖道、浄土等の分かれてくる原因であります。

## 八正道

苦……集……滅……道。

先には四諦の概要について申し上げました。

先ず私たちにとつて一番現実の問題は「道」であります。即ち道諦であります。道なくしては、滅諦に至ることは出来ないからであります。私は更に今少し八正道について味わつてゆきます。

## 正見

正見とは四諦に対する正しい信仰のことです。即ち仏教に対する正しい信であります。

正しい……この道諦のいづれも「正」の字がついています。正しく生きるということは、人間の生活の全部であります。我等はつまりこの正しく真実に生きるとは如何なることであるかを求めているのです。

正見、正しい見解、正しい信念からのみ生活は生まれます。正しいということがあれば、正しくない「邪」な信もあるわけです。然らば信とは何でありましょうか。正しい信を現わそうと思えば、邪な世界を現わさなくてはなりません。釈尊の「正見」を色々な言葉で現わすことが出来ますが、釈尊の歩まれた道は、これを「中道」という言葉で現わすのが一番適切であります。中道とは何であるか。

我等の人生に対する生き方を三つにすることが出来ます。

第一は、安価なる人生の肯定的態度であります。享樂主義者であります。悲惨なる人生の真相には耳をおおい眼をつぶつて、華やかな歡樂から歡樂に刹那を享樂して行く人です。死の恐怖も人生の矛盾もあつたものではない。花に酔う胡蝶のように、唯肉体的、感覺的美に陶醉して人生の意義も生活も忘れた人です。更に

これが若し、理性を盲にし、良心をしびらせて悪逆が平気で出来、善良なる人を苦しめて生きることが出来るようになれば、この種の人の存在は世にとって恐ろしいことになります。

第二は、厭世主義者であります。人生に対する呪い、厭悪、悲観のみしか持ち得ない人であります。人生には、悪質な闘争や、執念深い呪詛や、こみ入った奸詐わるたくみや、意外な迫害中傷や、上手な犯罪や、数え上げれば、限りのない虚偽と、冷酷と、暗黒とが満ちています。こうした半面のみを見て、不安と、恐怖と、嫌悪にくしみと、呪詛とに陥つて、人生を悲観し厭世する、極端なる人生の否定者であります。如何に多くのこの幽霊群を見ることでありましよう。こうした人の憂鬱な生活態度は、自分は勿論のこと、家庭を社会を暗くする中心となります。

無反省と恵まれた豚のような鈍感、享樂から享樂になれて理性は麻痺、魂は腐爛ただれたる安価なる人生の肯定者も、人生の暗い半面のみを凝視みつめて、ヒステリックになり、生きる力も、立ち上がる気力も失つて極端に人生を逃避し、否定せんとする者も共に、正しい信の人ではありません。

第三は、中道を歩む人であります。「正見」の人であります。この第三の人とても本能のなくなった人ではなく、又人生の暗黒面を知らないのではない。彼は本能的享樂に溺れて簡単に浅薄に人生を肯定してもいないが、また人生の暗黒面のみを見て、これを呪いつくそうともしない。あるがままの中にあるがままの人生を観て、その中に生きる天地を知っています。宇宙の相、天地の法則、人生の意義、生かされる道、静かにも皆の法則を諦観して、動乱の中にも安住と静寂を獲て、客観におこる一切の 4 事象をとり入れつつ、不退転に生きる所以であります。彼は苦悩の原因をつきとめて、ものの本質をみとどける、随つて彼には本質的な悲観はない。そしてまた享樂的な満足に有頂天になるような、薄つぺらな浮いた態度もありません。彼は道を生きる本質的な喜びは持つが、如何なる波瀾も、彼の超越と、安住と、光悦とを奪うことは出来ません。彼は因果を厳肅に承認して、よく人生に随順するが故によく人生を超越します。生死海にいつつも「弘誓の船」に乗託し、衆の禍はおしよすとも、至徳の風に波転じて久遠の喜びを感じ、罪悪業報の中におれども「罪悪も業報を感ずること能わざる」無碍の一道を歩み、一木一草も殺してはならないという善の態度と、罪に対する厳肅な裁きとをすてないで、遂に千万人を殺すと雖も絶対に救われるという神秘なる愛の領域に呼吸します。彼こそ人生に対する正しい生活者であります。

### 正思惟

正見は必ず、正しい思惟をともいません。生活者は必ず思惟します。正しい思惟からのみ正しい生活が生まれます。思惟のない処には宗教も、詩も、道義もあり得ない人間の高き文化の創造はない。大無量寿経においては、如来莊嚴浄土の本願は、法蔵菩薩五劫の思惟から生まれたことを説いてあります。これ即ち思惟の最高峰であります。本願なくして生活はありません。而して本願は、深い思惟から生まれます。正しい思惟は所謂、信心の智慧でなくてはなりません。智慧によらなくては、正しい本願を見出すことの出来ないのは何故でありましよう。

真実の願は決して凡夫小我のはからいによつて造られるものではないからであります。功利的な我欲からも高慢な邪見な分別からも、生まれては来ませぬ。真実の本願は、唯、自然一如の奥底からのみ顕現れて来るのみであります。自然一如の世界を直観するものは、智慧のみであります。智慧とは仏智である限り、凡夫自力小我の分別智をすてて、如来の無分別智に帰すべきであります。無分別智をもつて自然一如を体験する菩薩のみが、真実の本願を選択発起するのであります。これ聖人が、自力を棄てて他力に帰し、限りなく法蔵菩薩の本願を聞き、自然一如の奥底より、自然に顕現する久遠の本願に生きようとせられた所以であります。全一なるものを無視して、孤立的に抽象的に生存するものにどうして本願があります。全一なるものを無視して、本願になるためには、衆生は一切のはからいをすてて全一の流れに一体となるべきであります。

正しい本願に生きることによつてのみ正しい生活の創造はある。我等は思惟の極限である如来五劫の思惟の本願に帰命して、自然に法爾に生かされる大信大行の天地に無限のよろこびを感じるものであります。所詮、正思惟は正見（正しき信）の世界にのみあり得るのであります。

## 正語

### 正見

### 正思惟

について申し述べましたから、つぎは「正語」について味わつてゆきます。

「虚言を云うは盗人の初まり。」

「口と財布はとづるに利あり。」

「沈黙は銀、雄弁は金」

「口は禍の門」

等と口を誡めた幾多の諺がありますが、それだけ私たちの生活と口とは離すことの出来ない関係があるのであります。「語」を持つということは唯人間だけの特権であります。言語があるから、人と人との間の意志の疎通が出来たり、思いを伝えたりすることが出来るのであります。人間が社会的に文明文化を成就し創造してゆくことが出来るのも、一つにかかつて言葉があるからだと思われまふ。即ち人間の世界にだけ「教育」ということがあり得る。教育という作用は、時代から時代の上を、縦に思想や文化を残し伝えて行くということと、横に他人から何物かを受け取りつつ又、他人に授けるといふこと、つまり縦と横とに思想文化を伝え或は求めるといふことから成立つのである。「教育」という作用を通してのみ文明文化は成就されてゆく。而して教育は語とそれを表す文字があつてのみ可能である。かくの如く人間に必ずなくてはならない「語」であるから、仏教にも亦、語についての教えがあるのが当然であります。

「語」はすでに心のあらわれであります。心のままが出ているのであります。不正直な心が偽を云い、高慢な人間が、自慢ばかり云い、弱い者が泣き言を言う。であるか

ら仏教では、身、口、意の三業と云つて、口が身体及び意の業と共に問題になるのである。

沈黙、人間には沈黙の幾時がなくてはなりません。沈黙を尊ぶのは、内省を尊び、思惟を尊ぶからであります。砂漠の中スフィンクスのような沈黙、それには何の価値もありません。沈黙を尊ぶということは、やがてその沈黙を破つて出て来る、千金の重味ある語を尊ぶからであります。地上幾千年、人類の上に永久に何ものかを与えるような大聖の崇い考えも語となり、人類の歩みを根本的に変化さすような大哲人や、科学者の深い研究も語となつて残り、あつてもなくてもいいような無駄口も、寸言人を殺すような毒舌も語は語である。

#### 四悪

釈尊は、口に四悪を説かれました。妄語、両舌、綺語、悪口、上の三つは、皆、口と口とが相応していなくなつたり、口と行いが違つていふことであります。忠の字は口と心を書いて「一」が打つてあります。忠は忠実の忠の字、まじめなこと、まことのことでもあります。誠の字は、言成ると書いてあつて言葉が行いに成ることでもあります。妄語は、妄りに言う、出まかせを、心にもないことを、真実でないことを云うことでもあります。両舌は、甲乙と処や人が変われば言葉が変わつていふこと、綺語は、上部ばかり飾つた言葉、皆、まことでないことであります。悪口は、心の中に動く恐ろしい心をそのまま言葉にだしたのであります。大無量寿経には、

「ソ言の自害害彼、彼此俱に害するを遠離し、善語の自ら利し、人を利し、人と我と6を兼ねて利するを修習す。」

とあります。ソ悪な言葉は、自他共に傷つけ、善い語は、人と我とを共に明るくします。

#### 語の背後

其処で問題となるのは、言葉の奥に動いている心の世界であります。

仮令、滔々数万言、議会の壇上で声を枯らしても、自然の内奥から流れ出た大慈悲に立脚しないならば、そは一片のそらごとである。

仮令、音声美しく、抑揚おもしろく、身振りにぎやかに、しゃべりたてても、金剛不壞の信念に立脚しないならば、そは俳優の台詞にすぎない。

仮令、大衆万人に受ける美辞数万言の文章であるとも、絶対界に通う深さがないならば、小娘に喜ばれる三文小説と変わりはない。

一言であつても、大愛から、人格から、深さから、正しさから、生まれたものであるならば、人類を動かすに足る。

#### そらごと

だが我々が無反省な世界におり、何も考えない生存を繰り返しているならば、自分の云つている言葉が何であるかを知らないでありましょうが、一度厳粛に自分の言つていふことを内省しなければならぬ日が来た時、どれだけ真実を語つていふのであり

ましようか。裁く語、罵る語、恨む語、愚痴の語、こびる語、飾る語、泣語、嘲笑、等全てが無内容な、無価値な言葉ばかりではありませんまいか。

或は美しい真実らしいことでも、それが大部分は、他の人が一生涯かかつて血をもつて綴った語の受け売りや、口真似ではあるまいか。

そしてまた、今云っていることが今は真実らしく見えても、明日か、来年か、或はもつと先になつて見ると、皆いつわりになつてはいますまいか。「私はどんな辛苦をしても一生つくします」と誓われた言葉が、半年たたない内に崩れてゆきます。「浄心をおこすと雖もなおし水にえがける絵の如し。」所詮、真実の語は一語も発せずに死んでゆくのかも知れません。

### 真実のことば

真実のことばがほしい

親鸞聖人はこうした願求の最後に、地上でたった一つの真実の語を獲られたのであります。南無阿弥陀仏のお念仏がそれであります。

「謹んで往相の廻向を按ずるに大行あり、大信あり、大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり。」

大行とは称名、念仏することである。称名が何故大行であるのか、それは念仏が単なる空虚な音声ではなくて、称名念仏せずにはおられない、純粹意志の力が、その後動いているからであります。即ち行の奥には、如来自体の中に備われる自己実現の力、即ち如来の本願力が動いているからであります。念仏は如来本願力の顕現だからであります。声に救われるのではなくて、その内面に動く如来に救われるのであります。であるから、

「この行は、即ちこれ諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功德宝海なり、故に大行と名く。然るにこの行は大悲の願より出でたり。」と宣言して、念仏行の絶対善である所以を明かにしていられます。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、念仏のみぞまことにておわします。」

との歎異抄の聖語は、お念仏だけが真実であることの裏書であります。私は思います。念仏だけは、如来の本願から流れ出た一つの真実なる語ではあるが、更にこのお念仏に統一せられた人間の言葉もやがて「正語」と云うことが出来るのではあるまいかと。

### 正業

正見、正思惟、正語、つぎは、正業について味わつてゆきます。正業とは「正しい体の生活」のことであります。

釈尊は身業に於いて、殺生、偷盜、邪淫の三悪を挙げて誠められました。この三悪を厭い棄てて大慈悲の活動に生きよとの道が、即ち「正業」であります。

昔印度に於いて大聖釈尊の御在世には、二種の教団を造つて、指導せられました。第一教団は、釈尊の御弟子の集団、即ち比丘、比丘尼を以て組織せられてありました。

第二教団は、俗家の信者、即ち優婆塞（男）、優婆夷（女）の集団である。第一教団の出家たちは唯、托鉢によつて生き、第二教団の人は在家のまま世間の務に生きて、第一教団の人を供養するのであります。そこで釈尊は、第一教団の比丘、比丘尼に對しては、純理性の生活をなさしめ、家も妻子も、財産も一切の所有を悉く捨て、産業を営むことを禁じられました。そこで、殺生ということなど全く許されません。生物に危害を加えざるためには、必ず錫杖を鳴らして大地を歩行します。錫杖の音に虫けらは逃げてゆくのであります。又出家は外へ出る時には、必ず濾水囊を携えていて、水を飲む時には、その袋で水をこして、水中の小さい生物を殺さぬようにします。又、一年中でも生物が一番出て来る七八月頃の雨期には、安居と云つて夏期学校がはじめられ、其処で毎日、説法を聞き、修行して、外出によつて虫を殺さぬようにする。

誠に理想そのままに生きる出家の人たちは、虫一匹、草一本殺すまいとしました。これ全く一切衆生の上、虫けらにまで及んだ大聖の大慈悲の表れであります。

この不殺生の教は、殺すべからずという消極的戒律の裏に、一切の生命あるものを生かせよという積極的な大慈悲が生きています。尊むべきはこの精神生活であります。誠に生きるということは一切衆生に平等に与えられた特権であります。人間の生命が尊厳であるならば、虫一匹の生命も絶対であります。第一教団の人たちには絶対に対に殺すことが許されなかつたのであります。

殺生について偷盜があげてあります。ぬすむことの罪悪であることは勿論であります。これは財物に対する間違つた所有欲から来ます。随つて第一教団では、この所 8 有欲から始末をつけて、一物たりとも所有することが許されなかつたのです。

邪淫、男女の道に対する誠で、第一教団の人は絶対に異性に接することが許されなかつたのです。

聖道から浄土へ

殺生、偷盜、邪淫、我等は静かに生活そのものを内省する時、悲しいことながらこの三悪共に犯している自分、否生物の命をとらないでは生きられず、異性に對する欲求を本能的に持っているのをどうすることも出来ませぬ。されば理想をそのまま現実に生かさうとする聖道門の歩みにおいて「地獄一定」を感じられたのは親鸞聖人でありました。煩惱を断ずることが出来るどころか、煩惱それ自身に眼鼻がついたのが自己であることを知らされた聖人は、やがて今現におつべき所まで墮ちている自分の上に、如来の救いの手がとどききつて下さるお念仏の世界に更生されたのであります。自らの煩惱をそのままに、敢えて、肉食妻帯を断行し、あるがままに念仏しつつ、自然に浄化されてゆく浄土門他力の天地にほんとうに生きる世界を見出されました。

「あながちにわが心の悪きをもまた妄念妄執のこころの起るをも止めよと云うにも非ず、ただ商をもし奉公をもせよ。獭 漁をもせよ。かかるあさましき罪業にのみ朝夕まどいぬる我等ごときのいたづらものを助けんと誓います弥陀如来の本願にてましますぞと深く信じて」救われてゆくのであります。



浄土門では、殺生、偷盜、邪淫を断じつくして大慈悲に生きるのではなくて、煩惱のままが大慈悲に生かされるのでありました。

### 合掌

だが考えなくてはならぬことは他力本願の生活ということ、煩惱だけで終わる生活でないこととあります。身業に若し、殺生、邪淫などしかない生活であるならばそれは恐るべき地獄の道であります。他力本願の生活には、心にお念仏があり、口に称名があるように、身の上には合掌のあることとあります。如来の本願、南無阿弥陀仏は、合掌礼拝として顕現して下さることとあります。礼拝が必ずしも、真実の信ではありませんが、真実の南無阿弥陀仏は、合掌であります。南無阿弥陀仏の不行を「正定業」と云つたり、或は「正行」或は「正業」と云われてあります。煩惱の唯中に生きる、聖なる御はからいが生きて下さつて、不思議の正業を恵まれることを喜ぶべきであります。

### 自然の聖化

更に考えてみなくてはならぬことは、殺生しながら救われるお念仏に生きた老母の唯一の悲しみは、その息子が、たくましい犬をつれて鉄砲をもつて山に猟にゆくこととありました。血に染まつた猿や、羽を折られた山鳥を見る時、老母は悲泣するものであります。他に遊び方はいくらでもあるのに無益な殺生をする子供の生活を痛む母親の心は肯げます。又加賀の千代の「朝顔に釣瓶とられて貫水」という心境もお念仏の中に味われます。

家は愛欲の象徴である。然しお念仏は、この愛欲の家に根を下ろして咲く華でありました。我が夫親鸞聖人を如来の御化身と仰いだ、恵信尼公のみ心や、我が御内室を、観音の示現と尊んだ聖人の生活は、愛欲のままに終わらないで愛欲の中に自然の聖化を孕んでいたことを意味深く感じないではいられません。

真実の正業とは、理想の如来と、痛ましい煩惱との揚棄の中にあることを身をもつて知らして頂いたのであります。

### 正命

正見、正思惟、正語、正業と、お話しして来ましたから次は、第五の「正命」であります。

正命の正はただしいこと、命は活命の命で「いのち」です。生活です。正しく活命する、即ち正しく生きることとあります。もつと具体的に云えば、身口意の三業を清浄にして、正法に順いて活命してゆくこととあります。

身と口と意と、即ち全人格にわたつて正しく生きると言え、其処に必ず、正法に随うて活きるということがなくてはなりません。清浄なる戒をたもつということが、即ち正命であります。

身にも口にも意にも、ひきしまつた何もものもなく、一切が唯だらしなく放縦であることは、真の生活とは云われませぬ。煩惱の狂うままに、本能<sup>ほんのう</sup>我がありのままをさらけ出して恥としない、グウタラな生活は百年つづけられても何の意味を持ちませぬ。我等が大法を聞こうとするのは、こうした邪悪な生活にあきたらないで、もつと価値ある尊い生活を創造しようとするからであります。我等にとつて生きると云うことは、唯単に「命<sup>いのち</sup>」をつづけると云うことではなくて、もつと深い道を求め、道を生きようとするのであります。

戒をたもつと云えば、厳しい外面的な規則戒律にはまつて生きる窮屈な生活のようでありますが「無漏<sup>むろ</sup>の戒をもつて体とする」のであつて、其の根本精神は、唯単に規則づくめにする<sup>と云うようなことではないのであります</sup>。勿論釈尊は必要に応じて種々な戒律を定められましたけれども、それは、その根本において「さとり」があつてその自覚が生活全体を正しくするのであります。でないならば、涅槃に關係ない世間道となつてしまいます。ですから「正法に随つて活命する」、正しくみ法に生きるということが根本となるわけでありま。

この正命に対して、正命とは「五邪命<sup>ごじやみょう</sup>」を離るることであるとも説明されてあります。大智度論によれば、五邪命とは、

- 比丘、不如法<sup>ふにぽう</sup>の事を営みて生活するを邪命<sup>じやみょう</sup>という。それに五種あり。
- 一、詐現<sup>さげん</sup>異相<sup>いさう</sup>、世俗の人に於いて、詐<sup>いつわ</sup>つて奇特の相を現じ以て利養を求めること。
- 二、自説<sup>じてつ</sup>功能<sup>くわう</sup>、自ら己が功德を説いて、利養を求むること。
- 三、占相<sup>せんさう</sup>吉凶<sup>きうきう</sup>、占卜を学んで人の吉凶を説き以て利養を求むること。
- 四、高声<sup>こうせい</sup>現威<sup>げんい</sup>、大言<sup>だいげん</sup>壯語<sup>さうご</sup>して威勢を現じ以て利養を求むること。
- 五、説<sup>せつ</sup>所得<sup>じやく</sup>利<sup>り</sup>以動<sup>いどう</sup>人心<sup>じんしん</sup>、彼に於いて利を得れば、此<sup>こゝ</sup>で之<sup>これ</sup>を称説<sup>しやうせつ</sup>げ、こゝで利を得れば、彼に於いてこれを吹聴<sup>ふいぢやう</sup>して、以て利養を求むること。

これは勿論、比丘たちに対する嚴戒であります。そのまま我等の生活の鏡でもあります。指導的立場にある者ほど心がけなくてはならぬことでもあります。愚かな民衆の前に、詐つて奇特の相を装い、以て利養を得ようとしたり、声高らかに自己の功德、はたらき、学問等を誇りがましく述べたて、利養を得ようとしたり、占卜を学んで、世の人をまどわして、生活したり、大言壯語、自分より外に勝れた人はいないかの如く威勢をはつたり、彼処に利を得れば此処で語り、此処で利を得れば彼処で語つて利養を求むること等は、要するに、貪欲を中心に無智、高慢のつきまとつた嫌な生活であります。

生まれた者は生きねばなりません。生きるとは単なる生存をつづけることではなくて、正法そのものの流れた生活でなくてはなりません。

如来の本願力は、我等の全身全霊の上に大信となり、如来の名号は、衆生の上に大行を廻向成就します。正しい生活を求めて歩み、疲れた者の上に最後に於いて、南無阿弥陀仏の他力の大道が与えられた時、一切の煩惱は自然に聖化せられて、意には大信が、身には合掌が、口にはお念仏が恵まれます。身も南無阿弥陀仏、意も南無阿弥陀仏、如来においては、我等の生活はなくなりません。親鸞聖人の生活は一切を超えた

最後の世界において、全一に恵まれた南無阿彌陀仏の中に、安住と、法悦とがありました。南無阿彌陀仏において何処に正命があり得ましょう。

### 正精進

第六は「正精進」であります。正精進とは「真智を發用して強めて、涅槃の道を修すること」であり、無漏の勤をもつて体とするのであります。

懈怠であつてどうして道が得られよう、何事が成就せられよう。精進という二字は仏典の至る所に見える文字であります。誠に古今かつて精進努力なくして成就せられた、如何なる尊いものも見出すことは出来ない。

然れば精進の本質は何であるか、これは考えて見ねばならぬことであります。昨年松江高等学校の座談の時、一人の学生はこんなことを質問されました。

「仏教では一面、業を説いて、親鸞聖人の如く、よろづのことみなもてそらごとたわごと誠あることなしと云い、悪業煩惱のみが我等であるように説き、又一面には、精進ということ説くが、それでは、其処に矛盾がありませぬか。」

と云うのであります。私はその時、こんな風に云つておきました。今、大我と小我という言葉を使つて云うならば、迷妄なる小我のなす一切はこれを精進ということは出来ない。聖人が常に悲歎懺悔せられたのは、内觀されたる小我、悪業煩惱そのものであります。真実の精進とは、大我に根ざした活動でなくてはならない。真如の奥底より生まれたる本願そのままの生活でなくてはならない。と語りました。

「真智を發用して、強めて涅槃の道を修する」のが精進であるのはこのことを云つたものであります。真智とは、涅槃に通ずる智慧、さとの智慧のことであつて、凡夫自力の迷情ではありません。智慧によつてのみ、涅槃に至ることが出来ます。ですからこの智慧によらないあらゆる動きを精進とは言えません。地位や、名利や愛欲のためのあらゆる行為を精進というのではありません。頭燃をはらうが如く急作急修しても雑毒であり虚仮であります。唯智慧からのみ精進が生まれます。かかる智慧は、聖人にあつては仏智であります。我ならぬもの、如来のものでなければなりません。かかる仏智をたまわる時、我等にあつて信心の智慧となる。信心の智慧こそ、涅槃への唯一の真因でありました。でありますから、真実の精進は、念仏一道にのみ恵まれてあるのであります。

### 正念

第七は「正念」であります。真智をもつて正道を憶念して邪念なきことであります。正法、正道なくして、正念はありません。正道とは、無上正真の大道であり、涅槃への道であります。道なくして真実の生活があり得ようか、而して、道を憶念するなくして、道を生きていることが出来ようか。

我等は常に邪念である。しかも邪念であることすら気づかない。静かに内觀の世界に沈む時、あらゆる邪念の群りおこること八万四千、親鸞聖人をして地獄一定を宣言せしめたのも、そのためでありました。

然し聖人は遂に、南無阿弥陀仏に更生せられました。「正道を憶念する」とは、本願の大道を念ずることであり、南無阿弥陀仏を憶念することでありました。

「一念は即ち是れ一声なり、一声は即ち是れ一念なり……………」 正業は即ち是れ正念なり、正念は即ち是れ念仏なり、則ち是れ南無阿弥陀仏なり。」(行巻)

正念とは念仏のことであり、南無阿弥陀仏のことでありました。如来なくしてどうして正念があり得ましょう。

## 正定

第八は「正定」であります。正定とは、真実の智慧をもつて、無漏清浄の禅定に入ることを用いるのである。

人生は無限の動乱であり、苦悩であります。且に火裏に苦しみ、夕べに八寒の氷に痛む。春の日の長閑さも、思わぬ災いに破られ、秋の夜の名月も黒雲におおわれる。この間に処して若し、動乱苦悩のまにまに翻弄せられて、我の本質にふれず、人生の根源に徹せず、ものの相のありのままをさとらず、徒らに一笑一泣、波のまにまに浮沈したのでは、其処に本格的な生活のあるう筈がありません。

禅定とは決して、体だけが、静かな山の中や、寺院の中に坐っていることではない。正法を念じ正法を生きるが故に、そこに苦悩動乱の中に自己を投入して、よく随順し、超越して、火の中にも水の中にも、自然なる安心立命境を見出すことである。

真実に道を得た者のみ、笑つて笑わず、泣いて泣かず、苦しんで苦しまず、悩んで悩まぬ世界を持つのではあるまいか。

ヒステリーの女は泣いても、ものの本質に徹しているのではない、笑つていても法の本質にふれて真に笑っているのではない。この点から云うならば、道を得た者は、真に泣き得る人であり、真に笑い得る人である。真に笑い、真に泣くが故に。笑つて笑わず、泣いて泣かぬのは超越的な世界を有するからである。

動乱の背後には寂靜の世界がある。浄土であり、涅槃であり、如来であり、大信海である。

聖人は唯、念仏に生きられた、而して、禅定を語らずして、弘誓の大船上に真の禅定を味い、生活した人であった。だから見よ。行巻一念論において、さきの正念を明かしたまいしつぎに、

「正念は即ち是れ念仏なり、則ち是れ南無阿弥陀仏なり。しかれば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風靜かに衆禍の波転ず。」

衆禍の波がないのではない。然し、そこには弘誓大悲の願船があり、光明の広海がある。至徳の風そよぐ所、衆禍の波は、靜かに法悦に転じて、消えてゆく。

如来なくして何の禅定ぞ。然り、動かぬが故に禅定ならば、蟄蛙も亦禅定である。内と外、おこらばおこれ生死煩惱の波！ 如何なる怒濤狂乱も、南無金剛の大信海を如何にするものぞ。

## 八正道の主体

以上、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定と八正道を語りましたが、以上八正道の主体は、正見（正信）であります。いづれも涅槃に至る道ではあるが、正見こそ真の道であり、他の七つは枝であります。であるから、昔から、他の七つをば、道分道支どうぶんどうしと云われて道とは云われません。尤も正見も、道であると共に、道分道支であります。然し親鸞聖人は「信」一つを打ち出して他を云われませんでした。正見（正信）がもつとも優越的立場をもったわけであります。

### 大乘仏教と四聖諦

#### 迷悟の因果

私は以上大体八正道について味いながら、常に親鸞聖人の世界を伺いつつ、浄土教的立場を棄てないで来ました。私はこれから更に、四聖諦全体に帰って、総括的な味い方にかえらねばなりません。先ず、以前に出した、仏教の骨格としての四聖諦を出します。全く記憶するまでによくよく見ていただきます。

凡	苦諦（生死）……………果	迷
	集諦（煩惱）……………因	
浄土門………一体	滅諦（涅槃）……………果	不二………聖道門
	道諦（菩提）……………因	
仏		悟

諦は「あきいらかにみる」こと、真理をはつきり知ること。或は、真理ということ。人生は苦しみであると知るのが正しい道理である。生きること苦しみがついてい

るのではない。苦しむことを生きると云うのである。人生は苦しみだとはつきり知れ。それが苦諦であります。その苦果は、何が因となつて生まれたか、集じゅう、すなわち煩惱が因となつて苦が生まれた、と知らねばならない。即ち、生死（苦）と煩惱（集）とによつて、迷いが生まれるのである。苦と集とは、迷いの因果にすぎない。この因果に沈みはてしもの即ち凡夫である。

そこで、我等は、滅、涅槃のさとりに入らなければならぬ。涅槃をさとれるものは仏である。この仏果、涅槃の覺きやくに入るには如何にすべきか、その因をなすものは道諦、即ち菩提を行かなければならない。菩提とは即ち八正道である。

涅槃と菩提とは、悟の因果である。仏の全体である。以上が四聖諦の一応の見方であります。

迷悟不二

然し以上のような見方は、まだ大乘仏教の見方ではありません。即ち極めて、平面的な皮相的な考え方であります。なぜならば、苦しみや煩惱をいとうて、それのない涅槃に至るために、道を行くのだと考えられます。然しそれでは苦しみを逃避した涅槃で、小乗の考え方だからであります。

処が大乗の天地ではかかる逃避的な、或は生死とかけはなれた涅槃に囚われることを許しませぬ。その根本的な哲理が、次の如き思想の骨格を与えます。

	迷	集	苦	生死	生死即涅槃
不二	滅	道	悟	涅槃	煩惱即菩提
				菩提	

迷悟不二、生死即涅槃、煩惱即菩提、これらは、大乘教学の骨子であり眼目であります。生死のまんまが涅槃であり、煩惱のまんまが菩提である。迷と悟とは二にして二ならず、一にして一ならず、迷と悟とを、はつきり対立させつつも、しかも不二と、揚棄した処に、全一なる智慧の世界がなくてはなりません。この生死即涅槃、煩惱即菩提こそ、仏教だけがもつ思想であつて、所謂、聖道のさとの内容がそれであります。親鸞聖人も正信偈の中に「惑染の凡夫信心発しぬれば（因位）生死即涅槃なりと証知せしむ（果位）」と申されました。

「生死即涅槃」の大乗の世界は、「智慧の証果であります。智慧の世界であるとは「価値」の認識の世界であります。即ち、生死、煩惱は価値ならざる世界、涅槃、菩提は、絶対価値の世界であります。価値ならざるものと、価値なるものとの批判は唯、智慧によつてのみ可能であります。智慧界にのみ、価値と、反価値とが生まれるのであります。即ち、価値あるものを価値ありと認識する智慧光こそ、価値なきものを価値なしと批判し体験する光であります。

智慧

智慧は光明であります。智慧光が暗を照らす光である以上、生死、煩惱に属するものではありません。智慧はその本性として、涅槃に属するものであります。涅槃とは、法性であり、法身であり、真如であり、一如であり仏であります。即ち、智慧は真如に属するものであります。煩惱、生死は、無明こそその体であり、本質であります。随つて、生死、煩惱の中には生死を照らし出す光も力もありません。即ち我等に自覚ということが可能なのは、そこに、生死、煩惱以外の何ものかがはたらきかけなくてはなりません。滅、道がそれであります。滅は光明の源泉であり、道諦は、涅槃より流れ出づる智慧光の生み出した唯一の道であります。

## 道光

「生死の苦しきは、煩惱から生まれたものである。」このはつきりとした因果関係の認識、——釈尊の世界では、一切のものに因果を投入して観ることであった。——苦の因を、他の何ものにも求めないで、自ら作れる煩惱にありと、諦あきらに知る。この正しい見方には、すでに其処に光っている価値観がなくてはなりません。かくの如き、果に対する因をつきとめることそれ自身が、束縛されたる因果からの解放である。そしてかかる苦は、煩惱より生まれたものであるとの価値的認識は、其処に、光、或は「道」なくしては、おこり得ないものである。道あつてのみ、道ならぬ相を認めるのである。譬たとえば老婆が、等活地獄とうかつじごくの苦を唯、恐怖しているということは、宗教的にも、道義的にも無意味であります。等活地獄の苦しきは、殺生が因となつて生まれるという因果関係の発見、その意味を体得する所にのみ、教法おしえが教法として生きるのである。そして其処には、殺生に対して「殺すべからず」という道があつてのみ、殺生（因）と等活地獄の苦（果）とが意味を持つのであります。即ち、道光なくして、其処に厭うべき現実を発見することは出来ない。

## 即の世界

ここまで考えて来た時、道諦によつてのみ集諦が意味を持ち、滅諦によつて、苦諦が生まれる。即ち八正道なくして、道なくして、唯、財と名と、愛欲とを限りなく集め所有しようとする煩惱を信知することは出来得ない。煩惱即菩提とは、聖道家がとかく陥りやすい、糞、味噌をゴツチャにすることではなくして、八正道の菩提が生きるのみ、其処に生死の苦の因としての煩惱を発見し、生死煩惱の海ある故に、八正道の船が意味を持つことではなくてはならない。

而して、滅即ち涅槃とは、全一なる価値である、絶対なる実在である。この涅槃が顕現して体験界の内容となつてのみ、生死が生死として認識され、厭離すべき反価値として信知されるのであります。生死即涅槃とは、聖道家が陥り易い、糞、味噌ゴツチャにすることではなくて、信の智慧が、体験する内容であります。生死は現実であり、涅槃は理念である。理念界に内観される矛盾こそ、生死の相である。だが、涅槃が、絶対価値として君臨する以上、生死は、そのままに絶対価値に統融し、調和せられる。生死に随順しつつ、涅槃に超越する。超越とは「反逆」することなく、随順とは、妥協し囚われることでない限り、生死を超越するが故に、生死に随順するのである、生死に随順するが故に生死を超越するのである。而して涅槃は、生死動乱無常苦楽を超越せる絶対界である。この超越せる彼岸に飛躍するもののみ、生死界を生死界として知るのである。この慧眼えいげんなくして、どうして、生死の超越があろう。この超越の世界があつてのみ、生死界の意味を発見して、生死に即せる涅槃を生きるのである。生死に即せざる、単なる静けさや、清らかさを求める者は、小乗の声聞しょうもんや縁覚えんかくである。生死動乱に即せざる涅槃寂靜に何の意味があろうぞ。海をはなれた大船に何等の意味がないと同じことである。

## 大乘の至極境

涅槃は、菩提(道)の源泉である。道によつて浄土に至るのでもあるが、真実の道は、唯涅槃の樂(みやこ)からのみ生まれると云いきることが出来る。真実の本願は、唯自然真如の内奥からのみ生まれる。而して本願こそ唯一の道である。涅槃によつて大道があり、道によつてのみ、道ならぬ煩惱(集)とその果である苦とを体験する。単なる苦悩のみを問題とすること、そして苦に対する樂、即ち享樂を求めてゆく相は、そのまま無意味なる六道輪廻の相である。現代は実に、素朴的な唯物論や、科学的狂信によつて生み出された、享樂狂時代である。文明文化の没落の潮時である。この地獄のどん底に、新しき人間の世界、崇き文化の復帰をなし得るかどうか。

苦悩に対する享樂を求めることは、釈尊のみ教によれば、より悲惨な地獄を生む過程に外ならない。生死、煩惱の唯中に、大道が見出されなければならぬ。享樂を求める態度、それ自身が、苦を逃避しようとする相である。苦は逃避享樂によつて解決はつかない。涅槃に通う光を認める者のみ、苦の根本をつきとめて、煩惱を発見する。そこにのみ、道が見出される。道によつてのみ、煩惱は、存在の意味を持つのである。涅槃よりの光明は、無限に煩惱を浄化し、大善に転成する。大乘の世界が其処にある。かくて煩惱生死はありのままに深い意味を持ち、捨断すべからざるものと転換する。滅なくして、道はない。而して滅、道によつてのみ、苦、集は照らし出される。所詮、四諦は、四諦あつての四諦であつて、其の一をなくする時、全てはその意味を失つてしまう。苦、集、滅、道が一体となつて体験の内容となり、大乘仏教の骨格となり、信、生活、人生觀等々正しく打建てられる内容となるのである。

私は、更に親鸞聖人の他力本願の信と、四聖諦との交渉を語らねばならない。

前には可なり六ヶ敷いことばかり申し上げて来ました。然し、大乘的に四聖諦を了解するにはどうしてもあの程度の御理解を願つておかなければ、大乘の至極である「念仏の世界」はわかりませんから、先ず前を再三再四、熟読した上で、以下をおよみ下さい。

先ず聖道門と浄土門との差異であります。その骨格に至つては大体同一であるとするれば一体何処が違ふのであるか。これは大変な問題であります。よく普通に「広島から東京に歩いて行くのが自力で、汽車にのつてゆくのが他力」とこんな譬であらわされます。そうしたことも言えますが、それでは必ず所謂聖道の人たちから文句が出はしないかと思われまします。又「足のたたない者が車にのせられてゆくのが他力で、足のたつ者が歩いてゆくのが自力」こんな風にも云われますが、この喩ほど他力がとりちがえられて、どれほど人間を無力にしたかわかりません。

それではどう考えたのが一番いいだろうか。私は次の如く云つておきます。

「自らの智慧または、行(ぎやう)によつて、仏なりとの自覚に達しようとするのが聖道門であり、」

「自己を愚悪なる凡夫と体感して、仏に帰命するのが浄土門である。」

法然上人の「聖道門は智慧をきわめて生死をはなれ、浄土門は愚痴にかえりて往生す。」といわれたことは極めて妥当(たうたん)な判断(はんぱん)だと思ひます。即ち仏になるか、凡夫になるか。仏陀であるとの自覚にもその自内証(みうちしやう)には、一切衆生の無明煩惱の相が内感撰



取されていないなければならないし、凡夫との自覚にも必然、我ならぬ仏が顕現し、招喚していなければならぬ。自覚なき犬畜生は、仏でもなく凡夫でもない。仏として凡を撰めとるか、凡となつて仏に撰取されるか。其処に、聖、浄二教の分野が定められます。

私は今日を嬉しくも大般涅槃経の、拝読三昧に入ることを許されました。釈尊はこの経で、あらゆる我等の固定的な囚われを打ち破つていられます。有見、無見は勿論のこと、一切が空であることを高調し、空ということも空であり、ということも空である。而してそこに限りなく、涅槃の常、楽、我、浄を肯定して、仏性中道を大否定の底に打ち出そうとせられます。聖道門はこうした大乘教学を端的に把握しようとなります。

仏を我ならぬものと観じ、その我ならぬ絶対真実なる仏が、我を念じ給うことを信樂せられた聖人の絶対他力の信の世界にあつては、その信すら如来のものであります。信は勿論のこと、其の他一切の尊きものを表す文字、清浄、真実、一如、真如、法性、大乘、涅槃、道、智慧、慈悲、六度、等々の一切をば、全て如来にかえし、如来の内容として生かし、やがて、信の世界においてその如来と仏凡一体の統融をとげられたのであります。即ち聖道門の全てが、聖なる如来の内面を説けるものとして生かされたのであります。そうして、無常、苦、我、不浄、罪惡、無明、煩惱、流転、地獄、餓鬼、畜生、等々の価値ならぬもの一切を自己の内容と深信されたのであります。

我等は全て初めは、意識的に或は無意識的に聖道教徒であります。即ち精神内容の改造又は、生活行動の変化によつて、社会を人生を変化し、左右し得ると考えます。一切をありのままに認容しありのままに諦観するのではなくして、自己改造によつて、他の一切をも改造し得るといふ、高慢にも独我的な生き方をしようとして、聖なる法身をすら、自己改造によつて創造し得るが如く自任する。而してかかる聖道的態度をもてる者にはかくせよとの提示が、最後の正しい世界に出るために必要なことでもあります。聖人もかかる世界に二十年を費やされました。然し自覚し、改造し、建設した筈の自惚れは、内からの、外からの無明の嵐に、一瞬にして散乱されてゆきます。やがて其処に、一切を真に知ることの出来る智慧を修習して大きな転回がおとづれます。はからつて見てもさとつて見ても、煩惱を菩提に思いかえることも、生死を涅槃に転ずることも出来ないし、聖なる価値を創造しようとするこの徒勞であることを知れば、そこにコペルニクス的大転回をとげて、やがて巖然として独立し、実在する如来にふれ、如来に救われ、限りなく帰命して生きる信の天地が開いて来ます。絶対にして聖なる如来は、相対にして不純なる人間のはからいが創造するのではなくて、清浄絶対なる如来こそ一切群生の上に生きるのである。花が咲くことによつて春を創造するのでなくて、春が花を咲かして、花の内に春が生きてあります。自覚が深まるにつれて聖道より浄土への転回は、極めて自然に必然になされてゆきます。

浄土門にあつては、智慧は、如来に属し、道は如来に根ざし、浄土は如来の國であり、慈悲は如来の生命であつた。

今迄、捨つべきものと考えられた、生死煩惱は、如来大悲の活躍する舞台であり、如来の本願は生死海底にはたらいで、一切衆生を正定聚不退の菩薩に転成して、浄土の国土人天たらしめます。

如来の名号の招喚は、人生を否定し、小我自力を否定し、迷盲を否定して、衆生の自覚を通して、如来それ自身を肯定します。

如来のこの自己肯定は、真実なる人生の全的肯定であり、衆生の迷盲の否定は、迷える人生生活の全的否定であります。この否定即肯定の世界こそ、念仏の智慧の天地であります。

迷いは集（煩惱）を因として、苦（生死）を果として成立っていることは前から幾度も繰り返しました。この生死煩惱は無明の始終である限り、生死煩惱自らは、決して生死煩惱を自証する力を持ちません。生死煩惱を生死煩惱と照らし出すものは、智慧光だけであります。しかも智慧光はそれ自身如来心であります。如来は智慧光によつて生死を照らし、生死に化し、生死煩惱に大悲する。大乘正定聚の信心の行者が、限りなき暗を知り生死煩惱を内観否定することが出来るのは、実に、この大慈悲する如来の智慧によつて、眼を開かれてあるからであります。正定聚の信心の行者は、暗を自照すると共に、光の世界を知っております。光明を信樂し、暗を懺悔深信することにおいて、正定聚の菩薩は、暗と光との交叉点に生きています。誠に法蔵菩薩の聖容は、明暗の一線に拝し得るのであります。

滅とは、涅槃であり、浄土であり、仏であります。而して「道」はこの涅槃の樂より、現実の生死界に働きかける、如来の本願そのものであります。無上正真の大道は 18 唯如来心より顕現する。道即ち菩提、即ち八正道は、人間の相対的の倫理善ではなくて、無漏清浄なる法身の具体的顕現、即ち本願の内容である。

御本典の行巻を開いて、そこに引用せられた、龍樹菩薩の易行品の御文を拝読する時、この意味を釈然として了解することが出来るのであります。即ち、

「彼の八道の船に乗じ、能く難度の海を度す。自ら度し亦彼を度せん。我自在人を礼したてまつる。」「自在人」とは阿弥陀仏のことであります。八正道は、八道船となっています。如来弘誓の船は、八正道によつて円成されたる八道船であります。煩惱生死の海に沈んで、自利利他成就する船であります。苦、集の海なくして、八道船の意味がどこにありましょう。

「道光明朗超絶せり

清浄光仏となづけたり

ひとたび光照かぶるもの

業垢をのぞき解脱をう。」（和讃）

道は即ち光であり、如来の八道船は、道光によつて生死煩惱を照らし出しつつ限りなく衆生を業垢より超越せしめて解脱を与えるのである。

かくして、如来は、我等の本格的な生活の本質であります。